

麻酔科医の品格

小田切 徹太郎*

最近“〇〇の品格”という言葉をよく耳にする。坂東眞理子氏による“女性の品格”は100万部に迫る売れゆきと聞く。これだけ多くの読者がいるということは、現代にあっても品格という言葉・響きに何がしかの憧れ、心地よさを感じている証とも思える。出版理由について坂東氏は“今の時代は伝統的な美徳・道徳観が変化して、女性の社会進出は盛んになったものの地球規模での価値観、人生観は定まらない状況にあり、今こそ品格ある生き方について問い直す時期にある”と記している。

医師にあっても卒後臨床研修制度が実施されて以来、この4年間は価値観、人生観の変わり様は想像を超えるものがある。一昔前、医師は崇高な使命感を内に秘めて、昼夜を問わず身体がつづく限り診療に勤め、報酬は患者さんの支払いが可能になったとき、支払いができる範囲でよいという聖職者に似た人生観、価値観の下で医療に係ってきた。しかし現代は医師も人の子、家庭を支える働き手であり、自分を含め家族全員が健康で余裕のある生活ができることに主眼がおかれる。麻酔科医として考え方は同じで、よりよい条件が提示されれば移ることに躊躇は感じられない。高収入と家族中心の考え方は50歳以下の人達の人生観、価値観の共通認識となっている。

終身雇用制度が崩壊して能力給やパート契約制度が主流になることで、医師の使命感、奉仕の精神は消え失せつつある。こうした世間の風潮は職業選択にさいして高収入、定年なし、あっても天降り先のある上級公務員や医師が選択肢となる。実際、最低限の研修を積んだのちは学問・研究よりも経済的・時間的に余裕があり、雑用やノルマの

少ない病院に勤務し、より条件の良い病院があれば移ることにためらいはない。

卒後臨床研修制度が発足して地方から医師がいなくなり地方医療が崩壊しつつある。勤務医の過酷な労働は一層厳しく、とうとう病院を離れて自由契約で働くフリーランス麻酔科医が登場した。またいくつかの病院と契約し麻酔を請け負う出張麻酔開業医、都会の大病院や民間医局から麻酔科医がいない地方病院への派遣麻酔科医が急増している。彼らは手術がしたくてもできない病院の手術を可能にし、地域の医療に貢献するが、長期的な病院再構築、内部の環境整備、リスクマネジメントなど病院を良くする中核部分には全く関与しない。

医師は単に診断・治療に係わるだけでなく、医療施設としての向上に努めるのも大事な役割である。まして麻酔科医は手術室環境の整備、外科系医師、看護師、臨床検査技師、臨床工学技士など手術をとりまくチームの要として手術の安全を確保する責任がある。

医師として経済的安定と家族と過ごす時間の確保は当然のこととしても、今こそ教養を高め、使命感を養い、人としてあるべき姿に向かって努力する“医師の品格”を問い直したい。

*信州大学医学部麻酔蘇生学講座